

---

# 日向と雨

眠兎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

日向と雨

### 【Nコード】

N3492E

### 【作者名】

眠兎

### 【あらすじ】

ビジュアル系バンドマンの陽那汰が心に傷をもった女の子、滄と出会い、滄の傷をいやし、ギタリストとして、人間として、滄の優しく温かな心にふれて成長していく。

終わりが見えない海。

一万近い人の波に飲み込まれそうになりながら、始まったライブはスポットライトに照らされて徐々に熱を増して行った。

数年前までは夢でさえも見ることもなかった景色が今、目の前に広がってる。

夢か現実か分からないほど興奮した世界で、ステージを見つめて涙を流す姿を見つけた。

別に、可愛らしいわけでも何でもない、普通の女性。

ただ、どれだけの人の中にも彼女の周りだけが、明るく、優しく輝いているように見える。

その姿を見つめていると、何故かざわついていた心が落ち着く。

一度、浅く呼吸をしてドラムのカウントを待ち、後ろに控える隣にいる、4人のメンバーに絶対の信頼をおく。

それだけでいい。5年間積み重ねてきた。

何度も、何度も失敗して、その度に自分の選択があつたのかどうか、この仲間を信じていいのか、迷って悩んできた。

失ったものもたくさんある。

この瞬間で答えが出る。

何もかもが終わるか、新しく始まるか。

乾いたステイックが一拍目のカウントを刻む。

息を吸う。

二拍目のカウントで目を閉じる。

目を開けて息を吐き出すと同時に流れ込んでくる景色と自分たちの音。

ロツクの神様からの贈り物

## 一曲目

ステージにくぎ付けになった。

スポットライトに照らされて、

あなたの姿だけが浮かび上がる。

他は何も聴こえない、

あなたの姿だけが私の世界に流れ込む。

新しい、私になれる気がしたの

明け方の渋谷ほど汚いものはない。

酔って路上に座り込むおっさん、仕事終わりのホスト、カラスを蹴散らして歩いているチンピラ、通勤中のOL、積み重ねられたごみ袋に、誰のものともわからない吐しゃ物や精液の跡。

そこをごみ清掃車の少し先を歩きながら簡単にごみを纏めて行く  
単調な仕事。

缶瓶、タバコの吸殻は目に付いたら手元の袋に、それ以外の大きなごみは道の端に寄せる。

時には犬や猫の死骸なんかと鉢合わせすることさえある。

けれど、そんなことに怯えていたら自分が同じ姿になってしまう。

ひたすら毎日、毎日、毎日毎日、ごみを拾い続ける。

こんな事をするためにわざわざ上京したわけじゃない。

けれど、現実には自分が思っていたよりも遥かに厳しかった。

こっちにきて始めた最初のバンドがメンバーの不仲で解散、2つ

目のバンドはよそのバンドに誘われて脱退。3つ目のバンドで今度  
は仲間が引き抜かれて2カ月前に解散、ギターさえあれば何でも出  
来るはずだった田舎にいたころの自分とは違う。

将来どこるか、一瞬先の自分さえも見えない。

そんな中、その2カ月前に引き抜かれた奴から連絡があった。

ギターが足りないらしい。田舎に帰ろうかどうかと本気で考え始  
めた途端に掛ってきた電話。

とにかく、バイトが終わると生ごみ臭くなっている体も気にせず  
愛用のギターを抱えスタジオへ走る。

\*\*\*\*\*

店のドアに掛けられたカウベルが鳴る。

大抵平日の昼前にこの店に来るのは営業周りをさぼるサラリーマ  
ン。

「店長、コーヒー！」

「はいはい」

それから、ロピアスを4つも開けて眠たそうな顔でギターを担い  
だバンドマン。

「よ、滄あめい」

「いらつしやい。バイトはもう終わったの・・・？」

「今日は休み。これから新しいギタリストとご対面。」

口ひげを蓄えた如何にもなオジサンが旧式のサイフォンをセット  
しお湯を注ぐとアルコールランプの火がゆっくりコーヒーを上下さ  
せていく。

「どんな奴だろうね？」

「全然、知らない人・・・？」

「うん。ほら、2カ月前にうちのバンドに連れてきた奴いたじゃ

ん？それと一緒にやってたギターらしいんだけど、上手いかな？」

コーヒがサイフォンを3往復したのをみてアルコーランプを消し、温めていたカップのお湯を捨てコーヒを注ぐ。

「サンキュ……ん、ウマイ。そういえば、お前またお袋さんなんかあったか？」

砂糖もミルクも入れずに一口、唐突な質問に体が強張ったのが自分でも判った。

「……大丈夫だよ。」  
「無理すんな。」

「……ううん、本当に、浩がいれば大丈夫だから。」

「あ、あおちゃん2番テーブル片付けてくれる？」

「はい。」

布巾とトレーをもってカウンターの扉を押すと3日前の傷がひきつって痛む。

けれど、そんなのも日常茶飯事。

小さい頃から毎日、毎日、毎日、殴られるのなんてもう慣れた。

たばこの火が肌に触れるのなんか当たり前。

その程度で済むなら、まだ良いほう。

大丈夫、大丈夫とひたすら自分に言い聞かせて与えられた仕事をこなす。

そうやってずっと生きてきた。

## 2 曲目

お客さんがいなくなったテーブルを片づけカウンターへ戻ると浩がおもむろに話しかけてきた。

「……………どうしたの？」

「……………今夜は煮込みハンバーグが食べたい。」

「……………へ？」

あまりに真面目な顔をして言われた所為で一瞬理解できなかった。

「煮込みハンバーグが食べたい。」

「……………あ、うん、あ、煮込みハンバーグ……………うん。わかった。」

私がうなずくともものすぐくうれしそうに笑って砂糖もミルクも入れないコーヒを一気に飲み干し、グラスに注いであった水もついでと言わんばかりに空にしていく。

「……………つごそーさま！じゃ、楽しみにしてっから。たぶん 6 時には練習終わるからそしたら滄の部屋行くな。」

「うん。わかった。じゃあ、がんばってね。」

「おう！新しいギターリストがどんなもんか俺がばっちり確認してくっから、また後でな！！」

クシャッとした笑顔で手を振り、相棒であるギターを抱えてスタジオへ戻って行った。

「なんだ、あいつ全部飲んだのか？」

「何かしたんですか？パパ……………」

マスターが空になったカップを驚いた顔で見つめる。

「……………いや、何でもないよ。」

何となく含み笑いのような表情でカップを片づけている。

バンドマンは狼だから親子だと思われてたほうが何かと安全だからとパパと呼びなさいとマスターに言われて以来、ずっとバイトで



はパパと呼んでた。

でも、そんなこと言っている自分自身も昔はバリバリのバンドマンだったらしい。

ここに来るバンドマンたちによく悪戯をして楽しんでいるようだからあのコーヒーもまた何かして遊んだのだろう。

「・・・買い出し行ってきますね」

「おう、頼んだよ。」

いつものことなので気にすることもなく、午後の買い出しへ出かける。

なぜかさつきまで晴れ晴れとしていた空が曇ってた。

\*\*\*\*\*

雨の雫に薄紫の花が咲く深い睡眠が私を誘う

あなたの背中に指を伸ばし「行かないで・・・」

夢の狭間で声にならない言葉を

小さな部屋に一人きり

貴方を想えば・・・

薄紫のはかない現実が

冷たい雫となり私を晒す・・・

バンドをやっている以上は、しかも、それがビジュアル系と呼ばれる場所なら尚更、「狙い」と呼ばれる女の数はある意味、ステイタス。

渋谷駅まで行ったところで、スタジオまで歩くのが面倒になったので適当に車を持っていた狙いを呼び出してボケっと待ってる。

こうやって、一方的に呼び出しても文句ひとつ言うことなく意気揚々とやってくる。

お礼にキスやセックス、これで言うことなし。

「ひなたあ〜」

がっちりヘアスプレーでセットした国籍不明風な金茶髪の毛先をいじくりながら俺に手を振ってくる。

下手したら自分がステージに上がる時より派手な姫系の服を着込んでて周りの視線が痛いものの、とりあえず車に乗り込む。

「………赤坂のスタジオ」

わざと冷たく行き先だけを告げるとそのまま窓の外の昼間の街並みを眺める。

何となく、自分がそうゆうクールキャラで通ってるのがわかってるからあえてこっちから話を振る必要はないし、狙いと呼ばれる女たちはバンドマンの彼女になるために必死だから勝手にポンポンいろんな話を振ってくる。

それに対して「へえ〜」「そっか」「それで」の3つをひたすら繰り返していけばスタジオにあつという間につく。

「………また連絡する」

「ちよつとお〜タクシーじゃないんだからねえ〜」

何かをねだるようなこの物言い。タクシー代の代わりにキス一つで済むなら安いもんだ。

香水のきつい香りが一段と濃くなって、グロスであやしく光る唇に

できるだけ触れないように舌を滑り込ませる。

「じゃ」

ギターを抱えてスタジオへと降りていく。

まわりつくような熱気を払いつつ、息を吸い込んだ。

### 三曲目

スタジオの扉を開けると聞き慣れたドラムの音がした。

その部屋をのぞくと案の定数か月前まで一緒にバンドをやっていた結の姿があつた。

「よお、久しぶり」

「あ、来たか。待ってたんだよ。・・・こいつが前のバンドでやってた時のギターリスト。ま、服装がちよつとおかしいけどギターは申し分ないはずだから。」

「・・・おいこら」

「とりあえず、紹介しとくな。ベースの和泉とボーカルの珠洲」  
にこやかに笑って会釈をする二人に『よろしく』とだけ呟く。

「・・・ギターは？」

「ああ、浩か。そーいや、あいつどこ行つたんだ？」

「滄ちゃんとかだよ。今日滄ちゃん上がり早い日だから。」

眉毛がなくて、ピアスが目立ついかにもな顔つきの割に、人懐っこい笑顔を浮かべる和泉に何となくほつとする。

「またマスターに塩入りコーヒーでも飲まされてるんじゃないかね？あいつ滄ちゃんにちよつかい出してるから。」

何故か珠洲のセリフに結と和泉が苦笑していると唐突に防音扉が開いた。

「・・・つおつかれ！来てるな、お前か？新しいギターリスト候補」

「こいつが浩。こつち陽那汰。」

「とりあえず、自己紹介したってギターの腕は分かんないからさ、弾こう。お前何が好き？」

にこにこ笑つたまんま俺より数段値の張るギターを構えた。ちよつと悔しいものの、ギターは値段じゃなくて愛情と弾く人間のテクニクだと言ひ聞かせる。

チューニングを終えて全員が定位置につく。

「じゃあ、おれがカウントしたら入れよ。とりあえず腕試しだから気楽にな。」

「どこの世界に気楽に腕試しするやつがいるんだよ？お前らに完璧に合わせてやる。いつでもいいぞ。」

スティックをうつ鳴らす。

ギターだけの静かな掛け合いから始まる『陽の光さえ届かないこの場所』

ツインギターの掛け合いが軸のこの曲なら、お互いの力量がはっきりとわかる。

何より、自分自身が一番好きな曲でもある、曲が始まると一瞬にしてスタジオの空気が変わる。

それは観客のいないライブのような気分で、でも、誰かのためじやなく、自分のために必死に弦をはじく。

外の世界がいつの間にか土砂降りの夏空に変わっていた。

\*\*\*\*\*

「……………あ……………」

パパに頼まれた買い物を終えて店の外に出るといつの間にか土砂降りになっていた。

どおりで体の調子が悪いわけで。

昔から、雨が降ると体調が悪くなる。鈍い痛みが体中に浸みこんでくる。

でも何時までも立ち往生しているわけにはいけないので雨の中を走りだす。

荷物が濡れないように胸にしっかり抱き抱えて、できるだけ速く走ってみたものの、すぐに体が悲鳴を上げる。

「……………はぁ……………はぁ……………はぁ……………」  
人混みの脇に逸れて壁にもたれかかり、不規則な鼓動を何とか鎮めようと深呼吸をする。

けれど、一端おかしくなると中々おさまらない。

早く戻らないといけないのに、焦れば焦るほど鼓動は不規則になつて目が回る。

必死に息を吸おうと酸素を求めるものの、乾いた咳が止まらない。人混みが自分を避けていくのがわかる。こんな時絶対に他人は助けてれない。

「……………日野さん？日野さんよね」

声のほうを見ると見知った顔だった。

「せんせ……………つく……………」

小さく声を洩らすとキュツとした痛みが走る。

けれど優しく背中をさすってくれる温かい手にほんの少し安心してもう一度、息を吸ってみる……………ゆっくりと、呼吸しやすいように声をかけてくれる。

そのやさしい声を聞いていると次第に落ち着いてくる。

「……………もう、大丈夫です……………ごめんなさい。」

背の高い、黒髪の美人が心配そうに力をお覗き込んでくる。

「無理しないで。バイト先、この近くだったわよね？そこまで送つて行くわ。」

「いえ、本当に大丈夫なので。」

「いいのよ。今日は私授業無いから心配しないで。荷物持つわ。」  
流石、理美容専門学校講師だけあって、体の動きに合わせて長い髪がなめらかに揺れる。

「……最近、学校来てないけど、なにかあったの？」  
傘に半分入れてもらって歩き出すと唐突に聞かれた。

「いえ、なんにもないです。明日はちゃんと行きますから。」  
小さく早口でそれだけ呟くのが精一杯。

知られたくない。

幼いころから自分の置かれた状況は変わらない。誰も助けてなんかくれない。

返事をするとは雨の音だけがひたすら聞こえる。

「あの、遅くなってごめんなさい……」

「滄ちゃん！遅かったから心配したんだよ！体調悪かったんじゃないのか?!」

店のドアを開けるなりパパが駆け寄ってきて問いかけてくる。

「大丈夫ですごめんなさい……あの、先生が途中で助けてくれて……」

「はじめまして。日野さんの担任の堤と申します。具合が悪そうだったので心配になってきたんですが……」

「そうでしたか……滄ちゃん、いつも具合悪いときは無理して  
くるとないって言っただろ？奥で休んでなさい。先生は……」  
「ヒ」入れるのでそこにかけてください。」

パパに買い物渡すと奥の休憩室へ行く。

「いまホットチョコ持ってくるから待ってなさい。」

「……ごめんなさい」

「ありがとうだろうか？」

ニッコリ笑ってカウンターへ戻るパパにありがとうと小さくつぶやいて意識を手放した





#### 4 曲目

ひたすら弦を弾いて、弾いて、言われたこの一言。

「おまえ・・・・・・下手糞だな」

そりゃあ、そんないいギター使ってたらなんだつてできるだろと恨めしく思う気持ちと地元では誰よりも上手かったという自信をあつさり打ち砕かれたのに大分ショックを受けた。

けど、なんでか劣等感より闘志のほうが断然わいてきた。

「るせー！そんないいギター使つてりゃ誰だつてうまなるわ！このド阿呆！！」

「・・・陽那汰・・・」

結がひきつった顔を見せるのもお構いなしにニコニコと毒気のない笑顔の浩樹に向かって叫ぶ。

「おれ、お前のギター使つても今と同じくらいの演奏できるよ？お前の技術が足りない。ここで磨いてけ。ライブは1ヶ月後。それまでに全部覚えてくれよ。」

「・・・・・・は？」

「まあ、要するにメンバーになれたつてことだよ。下手糞。」

5センチもあるラバソを履いても俺より身長の小さい珠洲が少し背伸びをするように肩を組んできた。

その手を払うようにのけて4人を見据える。

「・・・・・・よろしく。」

金髪の奥に見える和泉の目が楽しそうに笑ってる。

「じゃ、一ヶ月後の初ステージに向かってひたすら練習すつか。

珠洲、お前譜面持つてるだろ？暫く陽那汰に貸してやってくれ。」

「あ・・・悪い、おれ譜面もコードも読めねえ。」

「は？」

結以外の三人がポカーンと口をあける。

「そういえばお前全部耳コピだったなあ。じゃあ全部一回ずつ通すからそれで覚える。浩、悪いがこいつのパートのとこ弾いてやってくれ。」

3人のリアクションをまるで無視して結が一人で勝手に話を進めていくが、しかたない。

ギターは4つ上の兄貴に教わっただけだからコードの読み方やまして譜面なんて見たことない。

目の前で弾いているのを見よう見まね。

なので、4人の前にどっかり腰を下ろし、浩樹の弦ダコでゴツゴツした手元をひたすら見つめる。

「じゃあ、順番に行くから、全部見て分かんないところあったら浩樹の後から聞いてくれ。」

「おれかよっ?!・・・まあ、しかたない。とりあえずいくぞ。

結力ウント。」

「はいはい。」

結のささくれたスティックが3拍鳴らすと音が流れ込んでくる。

俺はそれをひたすら見詰める。集中してギターの音を聞き取ることに専念する。

外の土砂降りの音なんかさっぱり気付かないまま

\*\*\*\*\*

「.....ん.....」

気がつくとも肩からかかっていたバスタオルが床に落ちる。

机の上には温くなったホットチョコが置いてあった。

「・・・・・・・・眠っちゃったんだ・・・・・・・・」

時計を見ると午後9時。店内から聞き慣れた笑い声がする。

ゆっくりと、冷めたホットチョコを飲み干し一息つくとしんわりとした体の痛みを思い出す。

真夏でも長袖長ズボン。

袖をまくって痛みの原因を見ようと赤黒いあざが肘から二の腕にかけて広がっていて、他にも体中に痣や切り傷がたくさんある。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

街を歩く女の子のように肩や腕を出してミニスカートをはくことは私には許されない。

「滄ちゃんいいかい？」

パパがドアをノックする。慌てて袖を下ろすと傷に触れて激痛が走る。

「・・・・・・・・滄ちゃん？はいるぞ・・・・・・・・どうした？！大丈夫かい？！」

「あ・・・・・・・・ごめんなさ・・・・・・・・だいじょう」

「いったいどうしたんだその怪我！！またご両親かい？！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「こっちにおいで。いま湿布と薬持ってくるから。今日はもう休んでいいからじっとしてなさい。」

少し怒ったような、それでもやさしい口調でパパに湿布と包帯をあてがってもらった。

半開きのドアから聞き慣れた笑い声がする。

なんでだろう、いつも思う。この素直で明るい笑い声を聞いていると心の底から安心する。

体の痛みもすーっと引いて行くような気がして。

「浩達来てるの・・・・・・・・？」

「ああ、なんか新しいギターの歓迎会だったよ。えらい下手糞らしいけど。」

温かな笑いを含んだパパの声と頭をなでてくれる大きな手が手当てを終えたのを教えてくれる。

「じゃあ私手伝わないと・・・」

「今日はもういいって言っただろう？もう少し休んでなさい。浩が帰る時に一緒に帰ればいい。」

もう一度ポンポンと頭をなでられお休みと囁かれる。

3日前の嵐がうそのように笑い声が遠のいた

## 6 曲目

「なあ、おっさん」

浩樹のバイクを見送りもう一度店に戻ってマスターを呼びつけると、その呼び方に不満を抱いたかのような顔つきで俺のほうを無言で振り返る。

「何か用か？糞餓鬼」

「・・・陽那汰だよ。」

「何か用か？陽那汰・・・おれの事はマスターと呼べ。」

「あんさ、おっさん・・・どうしたらあいつみたいなのギター弾けるん・・・？」

「そんなこと人に聞いてわかるのか？」

細長いバーグラスの水滴を一つ一つ丁寧にクロスで拭き取りながら一切目を合わせずに淡々と返事が返ってくる。

「人に聞いて分かるようなことならこの世のギター小僧は残らず本物のバンドマンになれるだろ」

「・・・」

「いいか、ギター小僧、俺はあいつらに期待してる。才能もあるし、それ以上にバンドとしての運に恵まれてる。あいつらにはロッキの神様がついてるんだ。お前は、あのバンドで、あいつらといったい何がしたいんだ？」

まっすぐ、見つめられる。何年も、何年も、たくさんの夢追い人を見送ってきた眼で、まじまじと見つめられて、思考が停止する。

俺は、あのバンドで何をやりたいのか

俺が、あのバンドで何をやりたいのか

「・・・すいません。マスター・・・帰ります。」

「おう、気つける。また来い、陽那汰。」

店の外に出ると湿気をたらふく吸い込んだ空気にやんわりと押し消されそうになった。

\*\*\*\*\*

「浩樹!!おきて!!.....浩樹っ遅刻!!」

「.....」  
「.....ん」

「ん、じゃないの、起きて!!」

「.....ん.....」

かれこれ40分以上声をかけ続けてようやく体を起してくれた。

浩樹を見ていると生まれたての赤ん坊が寝ているのを眺めてるような気分になる。

テーブルの上に卵焼きと唐揚げを出すと寝ぼけていた体が一瞬にして目覚める。

「から揚げ!!食っていい!!?」

「その前に歯磨いて、顔洗って、寝ぐせ直して?」

「おう!!」

威勢良く返事しているのに結局ひとつ唐揚げをつまみ食いしてバスルームに逃げ込まれた。

うちに浩樹が来るときは必ず唐揚げを作る。朝でも、昼でも、夜

でも。

私が作った料理を何も言わずにガツガツと音がしそうなぐらい一生懸命食べて、最後にすごい笑顔でごちそうさまと言うその顔が本当に満足そうで、これくらいおいしそうに食べてれると料理に自信がなくてもちよつとくらいがんばって作るうと思つ。

「滄あおいタオルどこ？」

「棚の上の使つていいよ」

「ん〜！」

唐揚げがまだ口の中にいるのか、ちよつともごもごした喋り方。

浩樹がシャワーを浴びている間に簡単な弁当を二つ作る。

弁当箱が二つとも埋まったところにちよつと浩樹がシャワーを浴び終えて首にタオルをひっかけ出てくる。

「やった！今日滄の弁当じゃん！」

「ちゃんと食べ終わつたらお弁当箱返してね・・・？」

「おう。今日バイトは？」

「うん、学校終わつたら行く。」

味噌汁とごはんをよそつてテーブルに置くと浩樹はいただきます、と丁寧に手を合わせてからちよつぱりガツガツ食べ始める。

「ほんなら・・・すたひおおはつてはらいふ・・・」

「口にももの入れたまま喋らないの。」

「・・・・・・・・それなら、スタジオ終わってからまた店行く！」

「うん・・・待つてるね。」

浩樹といると何となく、安心する。ずっと、びくびくして生活していた中で唯一、安心して話ができる。

美容師になりたいけど、バンドもやりたい、寝る時間も削つて学校とスタジオを行ったり来たりしてる浩樹を見ると「生きてる」って感じがして自然と笑える。

「そういえば、煮込みハンバーグ食い損ねた！！」

山盛りに盛つた茶碗をからっぽにした途端に思い出したように言

われる。

そういえば、昨日スタジオ行く前に言ってたな……。

「今夜食べたい！」

「うん。準備しておく。……そういえば新しいギターの人がうだった……？」

「あ、昨日滄みれなかったのか！なんか……すげーやばいやつ！……！」

「??？」

うれしそうに話すので多分、ものすごく下手糞で、ものすごく面白くて、ものすごく、いい人なんだろう。ボーカルの珠洲さんやベースの和泉さんがバンドに入った時もおんなじ顔をして話してくれた。

「で、次のライブ一ヶ月後。」

「楽しみにしてるね。」

「おう。きつとスゲー楽しいことになるぞ。……ごっそーさまでした！」

いただきますと同じように、箸を揃えてまたきちんと手をあわせる。

「うん、じゃあ、学校行こうか。」

「先下降りてて。俺鞆とってくるわ。」

浩樹の叔父さんの経営する美容院の寮として使われているこのアパートで浩樹の隣の部屋に住まわせてもらって1年半。あと少しで美容学校を卒業して一人の美容師として働き始めることになる。

食器を片づけて玄関を開けると、毛皮のコートを着た髪の長い男の人が居た。

何でなのかわからなくてしばらくお互い顔を見合わせていると男の人が持っていたギターケースを思いっきり自分の足の上に落っこ



とした。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・つ」こ浩樹の部屋ちゃうん？」

「え・・・・・・・・あの・・・・・・・・えつと・・・・・・・・やだ・・・・・・・・」

「あゝ！陽那汰！！何してんだよこんなところで！人の彼女に手出すんじゃないよ！」

ヘルメットと乱雑に教科書をつっ込んだ鞆を抱えた浩樹が私と陽那汰と言う人の間に入る。

「ちやうわ！ボケが！！俺は昨日の曲でわからんとこあつたし確認しと思つてあの店のマスターにここ聞いてきたんじゃない！！」

「とか言いながらお前ちよつと顔赤くしてんじゃないよ」

「うっさいわ！！！！いいからギター弾いて見せる！」

「俺いまから学校だし。お前音聞けば弾けるんだろ？ちよつと待ってる。・・・・・・・・滄大丈夫か？こいつが新しいギターだから、心配すんな。悪い奴じゃないから。」

ポンポンと私の頭を撫でて落ち着かせて、ニツコリ笑う。

男の人が怖い・・・・・・・・みんながみんな、父のような人では、あの人のような人ではないとわかってるけど、怖い。体が震える。

それを浩樹はゆっくりと抱きしめて、大丈夫だといつてくれる。

そうすると不思議なくらい、早鐘を打っていた心臓が落ち着いていつもどおり呼吸ができる。

私がちやんと深呼吸したのを確認してまた部屋へ戻る。

「あんた・・・・・・・・昨日の喫茶店でバイトしとつたやんな？」

「・・・・・・・・あの・・・・・・・・はい・・・・・・・・ごめんなさい・・・・・・・・」

「なんで謝るん？なんも悪いことしてへんやろ？・・・・・・・・俺あいつのバンドの新しいギターやし、よろしく。陽那汰や。」

「・・・・・・・・えつと・・・・・・・・滄です・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・陽那汰、デモ音源だしこれ聞いとけ。」

「お、おう。ありがとさん。ほな、スタジオで。」

「じゃ、滄俺らも行くか。」

「うん。」

重たそうな毛皮のコートが左足をかばいながら階段を下りて行くのを見送ってから自分たちも同じ階段を下りる。

なにか、不思議な香りに包まれてバイクで朝の街を通り抜ける。

## 7 曲目

音源・・・もらったはいいが指の弾き方を見ないと微妙なニュアンスがわからない。

「うゝあゝ！！！！こんなんでギター弾けたら苦労せんわっ！！！！しかも足痛てーし。」

一人部屋でごちるも小汚い中華料理屋の2階に間借りしているのでギターをかき鳴らすわけにもいかない。夕飯時ともあってあけっぱなしの窓から程よく空腹を刺激する香りがふわ〜んと漂ってくる。腹の虫は正直である・・・。。。。。

「腹減ったなあ。飯食いに行くかな。」  
財布を持たずに着信履歴からランダムに電話をかける。

2コール目ですぐに女の甲高い声がする。用件だけを手短かに伝えて昨日メンバーと騒いだ店に行く。

「あ、陽那汰おっそーい。待つてたんだよ？」

綺麗にマニキュアを塗った手が自分を呼ぶ。おう、とだけ小さく相槌を打ってメニユーを開き適当に注文すると、コテコテに化粧をしてキャバ嬢のような昼間の街中には不似合いな服を着た女がニッコリほほ笑みかけてくる。

そういえば滄はほとんど化粧つけがなかったけど白くてきれいな肌してたな。

髪もこんな観音様みたいにモリモリちやうかつたし、黒くて細かい柔らかさそうな・・・。。。

「電話くれたの久しぶりね？」

「そうだったけ？」

「前に連絡くれたのは2か月前だった。」

「ふーん……いただきます。」

運ばれてきたナポリタンを何気なく口に運ぶ……

「……」

「ちょ！陽那汰なに？？きたない……これ陽那汰のために選んだ服なのに！！！」

辛い……異様に辛い。この刺激的な辛さは間違いなくタバスコ。

運んできたバイトのウェイターを睨みつけるとカウンターのほうのマスターを指さす。

「……」

「なんなのっ！私もう帰るー！！！」

「……あ、おい！金っ！」

「……」

鞆から財布を丸々テーブルの上へ投げつけるように置いて行くとヒラヒラト薄い生地を翻して店のドアをけり飛ばすようにして出て行く。

「……怖え」

「ほら、これでそこいらに散らばしたもん片づける。あと、金はいらん。つけといてやる。」

マスターが投げたふきんがペシんと顔面にヒットした。

\*\*\*\*\*

学校が終わってバイトに行く店のドアが勢いよく開いて綺麗だけど香水のきつい女の人が出てきた。

「おはようございます」

「おう、あおい滄おはよう。」

「・・・マスター！！飯！！つか陽那汰おまえ何してるの？」  
「うっせ」

いそいそと料理をカウンターに片づけテーブルを拭いている姿が昔見たアニメのカバにそっくりの妖精のようで少し面白い。

「パパ・・・彼バイトにするの？」

「いらんよ、こんなバイト」

「あくわかった！今店から出てきたおまえのだ！！ほんで振られた！！」

むつつり黙ったままひたすらテーブルの片づけだけをしている。

「あ、あの・・・あとは私がやるので座っててください・・・」

「ん。わりい。じゃあ頼む。」

ふきんを受け取ってテーブルの上に残った料理を片づけていくとナポリタンから異様なにおいが漂ってくる。これできつとむせつちやっただらうなあ。

さっきの女の人の服のシミはこのタバスコナポリタンの被害にあっただなあ。

パパをみる目つきが微妙に覗んでる。

「で、陽那汰お前ギターは？朝音源渡したろ？」

「いや、もつかい弾いてんのみたらできる。」

「ふ〜ん。じゃあ。スタジオ行ってからだな。・・・いただきま  
す。」

浩樹がきちんと手を合わせて食べ始めると手持無沙汰になったのがギターを取り出して弾き始めた。

世間の食卓では夕食が終わり始めた時間。他に客のいない店内に陽那汰のアイコースティックギターの音が響く。

「おまえ、アコギは弾けんだな〜」

「エレキも弾いとるわボケ」

「すごく、上手だと思います……」

「ほんまか!?!」

「……あの、でも私あんまり詳しくないので……ごめんなさい」

ものすごくうれしそうに笑うのでついパパのほうを見て助けを求めるとパパもなぜか満足そうに笑いながらグラスを磨いている。

「滄が上手いっていったギタリストはみんな成功してるぞ。お前良かったなあ。糞餓鬼」

「……」

「素直にうれしいって言えよ」

笑いを無理やり噛み殺すようにうつむいてギターをしまっ仕草がなんでだか妙にドキドキする。

「じゃあ、飯も食ったことだし行くか。ライブはもうすぐだ!!」

浩樹と並んでギターを背負う姿がすごくうれしそうにギターを弾くのが心底楽しいのが自然と伝わってくるような笑顔。

不思議と恐怖を感じない人だ。

パパにぺこりと頭を下げて店を出て行く。

「良いギター拾ったなあいつら。」

「うん。浩樹もすごくうれしそうだったよ。」

「滄も珍しく人見知りしてないしな」

「……うん。すごく不思議な人。」

初夏の空気を巻き込んで両翼が飛び立った

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3492e/>

---

日向と雨

2011年1月27日14時18分発行